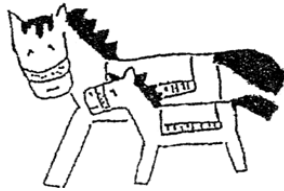


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

26年 11月 NO. 240



(厚生労働省・高松市委託事業)

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

～どなたでも～ 11月の主な活動 ～お気軽にどうぞ～

11月 8日	土	「うまれる」映画と やすらぎコンサート 13:00～16:00	高松市生涯学習センター（まなびCAN） TEL:087-811-6222 で開催します。
11月 15日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って遊びましょう。 ご家族で見学もどうぞ。
11月 15日	土	あなたもマジシャン！ 14:00～16:00	カエルのおやつ・のろのろ亀さんの製作と 手品をします。どなたでもどうぞ。
11月 26日	水	健康育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科医）にゆっくり相談できます。 (要予約)
11月 27日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	専光寺住職 佐々木氏の「親はこどもとおない年」 というお話を聞き、フリートークします。
11月 28日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「秋いろいろ」をテーマに秋の七草や どんぐりの絵本や手あそびがあります。
11月 29日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も育児体験に おいでください。

・火～土の13時～16時までは、園内開放しています
ので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話全集⑥
さみしい王女・下より

落葉、のこらずすていた。
そして、帰って見た時にや、
誰か、きれいに掃いていた、

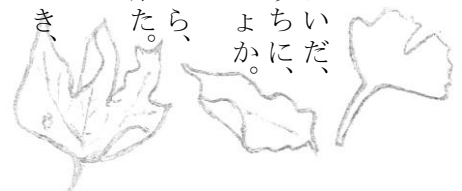
あとの角までついでと駆け出して、
通りの角までついていった。

さらりと一掃き掃いたとき、
表に楽隊やって来た。

ひとり嬉しくなってきたら、
ひとり嬉しくなってきたら、

こたあれも知らないおきましようか。
お背戸に落ち葉がいっぱいだ、

落葉



高松市医師会看護学校の学生（42期生）37人（うち男性13人）が保育実習しました。

その学生さんの記録から気づきや学びについて、3歳、4歳、5歳の各クラス別にご紹介しましょう。

～さくらぐみ（3歳児クラス）～

こども一人一人に個性があり、性格も行動パターンも違う。それを理解し、対応することの大切さを学んだ。そして、集団の場合には、1人の子どもに集中しすぎると他の子どもに目が向かなくなるので、広い視野を持ち、対応していくことが大切である。そのため、集団の中でまちがった行動をすると、時として注意も行っていった。人間を相手にするという事では、看護師も保育士も似ているため、いい実習になった。

遊びについて

幼児期前期の最大の特徴は、筋肉組織の発達がめざましいことである。子どもは、歩く・走る・跳ぶ等の全身運動や手を伸ばして外界の物にふれる、しっかり握る、ひとりじめする、手離す、投げる等の活動を活発に行い始めることである。園庭で走り回ったり、三輪車に乗るなど全身の筋肉を使う遊びを行うようになっている。また「おもちゃを勝手にとる」と訴えるが「貸して」と言ってみようと促すと、他の子に聞くことができ、トラブルなく物の貸し借りができている。譲り合いなど、対人関係が円滑になるよう促す関わりも必要になる。

～ほしぐみ（4歳児クラス）～

切り絵・ぬり絵

小学校入学を見すえて、様々なワークに取り組んでおり、今日は切り絵・ぬり絵であった。はさみを上手く使える子や使えない子の差も大きく、同じ4歳児でも、月齢のちがいによって発達段階に差が出ている。また、理解力の面でも、1人で集中して作業に取り組む子と周囲のようすを見てまねする子がおり、個人によって指導方法を変えていかなければならない。そのために、一人一人の特徴や能力をよく観察して、知っておくようにする必要がある。

4～5歳児のクラスで実習することになり、鬼ごっこなどのあそびを通して、小児の発達段階に応じた他の児との関わりや社会性について学ぶことができた。課題として多くの児と関わっているが、ひとりの児が転んだり、他の児とぶつかったりしないように、全体を広い視野を持って関わっていけるようにすることが大事、昼寝の時もなかなか寝かしつけ

ることができなかった。



～すれみぐみ（5歳児）～

本堂でのあいさつについて

当保育園は、仏教保育園であり、保育内容において、日々、本堂においてのあいさつや朝・帰りの時に仏様へのあいさつを必ず行っている。子どもたちが健康に健やかに育つという思いや生きていることへの感謝の気持ちなど、様々な思いがこめられたものであると考える。また、全てのことに感謝するという気持ちは、子どもたちが成長・発達していく上でとてもよい影響を与えているといえる。

あいさつは、人間が生活していく中で最も大切な礼儀である。当保育園では、これらの保育内容を通じ、子どもたちが日々生活する中で、あいさつ行為が自然に身についていると考えられる。

あそびを通して

年長児では、自主と協調の態度が実際によく観察できた。仲間の中にもリーダー的な存在の園児がいて、ゲームの進行をしている。この頃になると、仲間の意思や仲間の中で運用する約束事が大事なものとなり、それをみんな守ろうとする。集団あそびが活発に展開され、遊びの中でもそれぞれ役割が生まれてくる。役割を担う事でみんなが共同し、社会性を身に付けだす最初の発達段階にあると考えられる。

今月は、^{くまひら}熊平製作所（製造会社で今年は創業116周年）の熊平源蔵氏が昭和6年11月に「^{ぼっすい}拔萃のつづり」を創刊しました。これは、積極的消費論と学校教育の普及と改善、また宗教は現世の浄土化思想として必要である、という考えを持っていました。そのようなことに関する各方面の諸名士のご意見をまとめたものがこの小冊子です。

今年で73冊目になるそうですが、その中から一話をご紹介します。来月は、書家金澤翔子さんのことについてをご紹介します。

ピアノが弾けた！

村田 幸子

鍵盤に覆いかぶさるようにして一心不乱にピアノを弾く。彼には右手首がない。加えて重度のダウン症である。弾き終えて深々と一礼した。晴れがましさを身体一杯に漂わせて。

30人ほどの集まりで、私は彼の演奏を聴いた。鈴木凜太郎^{りんたろう}さん、22歳。手のひらのない凜太郎さんのために6本指バージョンとして特別につくられたベートーベンの『悲愴』^{ひそう}第

二楽章であり、シューマンの『トロイメライ』などであった。今彼は、障害者センターの中にある喫茶店で働きながら、月に2回ほど、さまざまな会合でピアノを披露するという充実した暮らしをしている。母親の真己子さんは「まさかこんな日が来るとは夢にも思っていなかった」と述懐する。

凜太郎さんが重度の重複障害を持って生まれてからほぼ5年間は、「誰も私に話しかけないで」という雰囲気、真己子さんは身体中から発散させてキリキリしていたようだ。友だちには子どもが生まれたことを伝えず、近所の人と会っても逃げるようにして足早に離れ、凜太郎さんの右手には特製の手袋をつけて人目にさらすことなく、隠し通した。

妊婦としての自分は、食生活にも生活習慣にも十分気をつかい、一生懸命やってきたのに、なぜ我が子が障害を持って生まれてきたのか。真己子さんは、どうしてもその現実を受け入れることができず、頑かたくなに心を閉ざし続けていたのである。

そんな彼女も、やっと社会に向けて心を開くことができた。きっかけは、凜太郎さんが心臓手術のため小児病棟に入院した時の、子どもたちの対応である。「何で手が無いの?」「痛くないの?」「ご飯食べられるの?」と矢継ぎ早に聞いてきた。この子たちは私たちが傷つけようと思っているのではない。自分とは違う凜太郎に疑問を持ち、心配してくれているのだ。真己子さんは自然で素朴な子どもたちの態度に、自らの固い心が解けていくのを実感した。

凜太郎さんが地域の普通学級に入学してからは、真己子さんは障害を隠すことなく、周囲と上手におつきあいすることができるようになった。回り道した子育てだったけれど、自ら心を開けば手を差し伸べてくれる人はたくさんいる。障害は誰にも起こりうることなのだということがやっと受け入れられるようになったと、晴れやかに話してくれた。

凜太郎さんは実に人懐こい。表情豊かに人に話しかけ、よく動き回る。音楽好きなので両親は早くから楽器に馴染ませ、小学校5年生からはピアノのレッスンを始めた。

レッスン初日、左手だけで弾く凜太郎さんに、先生は「右手は何をしているの?」と聞いたという。そして自分の右手をグーにして、左手と合わせた六本で『猫ふんじゃった』を弾いて見せた。それが凜太郎さん独自の六本指バージョンの演奏につながっていくのである。

知的な障害のある彼が、曲を覚え、弾きこなすまでは、相当な時間がかかる。5～6分の曲を仕上げるのにも、年という月日がかかる。でも熱中できる好きなことにめぐり合った凜太郎さんは、仕事から帰って毎日3時間、みっちり稽古をしている。目指すは、この秋ウィーンで開催される「国際障害者ピアノフェスティバル」への出場である。

障害に対する自らの偏見と無理解に苦しみ続けた真己子さんだが、これからは、どんな人にも可能性があり、チャンスがあるということを伝えていきたいと前向きだ。